

平安物語の一特徴語彙「正身」^{サウジミ}の和漢比較

——源氏物語の用例を中心に——

黄 建 香

一 問題の所在

「正身」は中国では荀子の時代から既に存し、現代でもよく使われる言葉である。日本でも万葉集から現代まで生きてきた言葉であり、特に平安物語に用例が集中していることが調査によつて分かった。語釈について『岩波古語辞典』では、「正身：さうじみ サウはシャウの直音化。シミはシンの転。当人。本人」と解釈されている。この「当人」を意味する「正身」の用例数が、どうして当時汎用されたコレ・ソレ・カレ・コナタ・カナタ・アナタ等比べてずっと少ないかが問題のきつかけである。例えば、「今ややうやう忘れゆく際に、かれはた、えしも思ひ離れず、をりをり人やりならぬ胸こがるるタもあらむと、おぼえはべり。これなん、えたもつまじく頼もしげなき方なりける。」（帚木1・一六〇）のように、頭中将の体験談の女の名前を省略して指す時「かれ」と「これ」が代名詞として用られている。カレ・ソレ・アレ・コナタ・カナタ・アナタなどの

代名詞があるにもかかわらず、「正身」を使うのはきつと作者の識別使用が働いたに違いないだろう。ここでは代表として中国の辞書類の語釈も一種引用する。『漢語大詞典』では「①端正自身、修身。（訳文：身を正す）②謂不阿。（訳文：一本気で人に阿らない）③猶直身。（訳文：体をまっすぐに伸ばして仰向けに寝る）④謂確系本人、並非冒名頂替。（訳文：替え玉ではなく、本人）⑤科挙正途出身。（訳文：試験を受けて採用になった経歴）」となっている。①は動詞＋名詞の熟語で、②③④⑤は形容詞＋名詞の熟語である。漢文では①と④の用例が一番多い。

『日本国語大辞典』、『角川古語大辞典』、『広辞苑』等はほぼ『岩波古語辞典』と同訳である。『漢語大詞典』の④に近い。ただし、「替え玉ではない」と指摘するものはない。④の語釈に当たる実例では「正」と「替」が対義語になっており、つまり「正身」に対して「替身」が存在するはずである。④番目の語釈の初出例は、以下にも触れる、唐の杜佑撰の歴史書『通典』にある。少なくとも唐までは「正

身」の代りに「替え玉」を利用する現象はあったが、記録をしたのが同書が最初である。そこが古有の「自」や「己」との根本的な違いでもある。

「正身」についての先行研究は少ないけれども、各指摘が大いに参考になる。中田武司氏¹⁾は同語が源氏物語における対象別、使用率、分布を分析し、作者の創作意識の視角から論述している。伊能健司氏²⁾は他の作品の用例の表現と異なつた源氏物語の地の文二三例を細かに分析し、共通の特徴点を説いたが、会話文と心中表現の例に波及しなかったため問題が残っている。同氏は論中、「ある時期に集中して使われる傾向が見られるわけであるが、(中略)それは精神的に保護者から自立していない女性がある困難な状況に直面して、それに対処する能力に欠けている状態の時に、その特別な心理に作者が注目して、感情が」入ったことまで言及したのに、正身の語がどうしてそういうふう機能できるのかについては補足する必要がある。小山清文氏³⁾は正身は「特定の人物、特定の時期に限られて用いられている」言葉であり、「物語の中心に据えられている人物が、不安定な状態や、苦悩の状態にある時などをとらえ、そして又何らかの欠陥のある、完璧ではない、物事に対処する力が十分でない人物に、それを取り巻く女房、親、懸想人などによって、その隔絶された存在を位置づけられながら、用いられる傾向が強い」と論述している。白石佳和氏⁴⁾は語り手の考えと隔たりがあることを強調し、「正身」以外の親や女房という周囲の人々の存在を注目させる言葉

として、「語り手がある作中人物を「正身」と呼ぶことは、語り手が「正身」に対する距離感を表明することに等しい」という結論を下した。しかし、先行論のいずれも地の文の用例の共通性を見出すことに止まり、それぞれの論点ですべての用例を解釈することができたとはいえかねる。本論では、用例のあるすべての作品を列挙するのが不可能であると考え、日本文学においては万葉集の一例、使用回数が多い宇津保物語と落窪物語と源氏物語の用例等を中心に分析を行ない、漢籍においては、古代の哲学書、史書の用例を紹介する。唐代伝奇小説には一例もないにもかかわらず、同語が平安物語に頻出する原因を考察し、受容の幅を制限した両国の文化等の違い及び王朝文学と伝奇小説との差異を見出し、漢籍との比較によって日本における――特に平安時代の物語作品の――同語の意味の変化を新たに考えてみたい。本論では主体である人物の「正身」と呼ばれる場面の状況と前後の呼び名の変化、及び漢文における本来の意味を考え合わせる考察法を用いる。

二 漢籍における用例

『漢語大辞典』①の語意の初出は荀子⁵⁾の著書にあり、同時に「正身」の言葉の初出でもある。例として、『修身篇』の「禮者、所以正身也。師者、所以正禮也」や、同じく荀子の『堯問篇』の「彼正身之士、舍貴而為賤、舍富而為貧」などのように、「正身」は『荀子』では非常に利用率の高い言葉である。『後漢演義』の「正身無玷、死

心社稷」等の使用は荀子を後継したものである。同語は日本では後に「身を正す」との連語に替えられた。同辞典の④の解釈が日本語の意味と最も近いので、以下、④を中心に比較する。

『通典』の「選舉五」において、「選人不約本州所試、悉令聚於京師、人既浩穢、文簿繁雜。因此滯濫、其事百端。故俗間相伝云、「入試非正身十有三四、赴官非正身十有三三」。此又弊之尤者」と言う記述がある。大意は、受験の時には本人ではない者が十に三、四人はいる。官に赴任の時本人ではない者が十には二、三人はいる、と。即ち、入試や赴任の際、替え玉を使つて欺瞞する不正な手段を利用するのが一種の社会現象であつた。それは『漢語大詞典』④が言っていることである。『通典』の影響を受けて、清代からの小説にも「正身」の語を使い始め、しかも主人公の身分を表す重要な役目を担うような言葉となつた。調べたかぎり用例のある作品の全部が正身と替え玉の話に関するものである。紙数のため一例だけを挙げる。清の呉璿編『飛龍全伝』には「只要正身、不許替代。快叫正身出来説話」（替え玉を使つてはいけない。正身だけに会いたい。今すぐ正身を呼んできてください）という描写がある。「正身」の語は法典、史書及びこれらの作品以外には用例がない。殊に伝奇小説にも使われていない。替え玉の描写があつた『無双伝』にも用例がないし、『離魂記』で倩女の魂が遊離して、魂の個体と抜け殻の個体の二人に分離していても「正身」の語は使われなかつた。少なくとも唐代では「正身」の機能を拡張させた跡は見受けられない。身を正す意味の

「正身」と、『通典』に習つて、以降の作品の替え玉の対語としての「正身」の二種が主流となつて今日まで踏襲されながら微妙に変容されてきた。『通典』の用例が次に述べる日本の物語の用例に大きく影響を与えたものとして注意をしておきたい。

三 万葉集の用例

万葉集卷十六の三八一〇番歌「味飯うまいひを水に醸かみなし我が待あちしかひはかつてなし直にしあらねば」の左注に「右、伝云、昔有娘子也。相別其夫、望恋経年。尔時、夫君更取他妻、正身不来、徒贈裏物。因此、娘子作此恨歌、還酬之也」（全集本）となつている。「正身」の正体は即ち夫であり、本人が来るべきだが、他の妻を娶つたからお使いを遣つて贈り物だけは届けていると。使者を当人の代りに訪ねさせることは夫婦の縁を保ちたい行為で、当人がやるべきことを他人に頼む場合に「正身」の語を用いる点は『通典』の例に似ている。

平安時代の養老令の官撰注釈書『令義解』の「官衛令第十六」では「凡兵衛衛士上番。皆須検点正身。然後奏聞。謂兵衛衛士。正身見在者。即以小墨点其名上也。」と書かれている。宮を守衛する兵衛と衛士が帝に奏上する際、当然ながら本人であるかどうかの検査を受けることになつている。つまり中国語でよく言う「驗明正身」（身柄の確認）のことである。「正身」は即ち正確な身柄のことである。これも『通典』、『万葉集』の用例と軌を一にしている。而して、

代替者を使つてもとの妻のところに贈り物をする万葉集の例は『通典』と『令義解』と異なる点も見分けなければならない。中国ではそういう使い方がまずないし、日本においても初めて男女の交際を描くところで用いられるようになった。この例が後の語誌を影響したものだと考えられる。さらに後述するように、物語作品は漢文の例と『令義解』や『万葉集』の例を受け継いで、平安宮廷の文化生活と結び合わせて新しい意味を創造した。

今まで挙げた用例は「本人」の意味に近いけれども、代替者、代り者に対していう言葉で、別語では言い換えられないものである。だから、勿論当時「本人」の語はまだなかったし、たとえあったとしても両者の意味合いには異同がある。以下、宇津保物語以降の用例と万葉集の用例とがどこに差異があるのかに注目し、また「正確な身柄」という元来の意を基準にして物語作品を考察する。

四 宇津保物語の用例

宇津保物語には五例ある。

①（上野宮）あて宮に御文あり。されど、あやしきものに思はし、聞こえたまはず。（中略）「この女なむ、耳につく心につく。

しかあるに、父大将に請ひ、正身に請ふに、女も大將も、今に承け引かず。いかなる仏神に大願を立て、なでふことのたばかりをしてか、女の赴くべき。」（藤原の君1・一五四 新編全集本以下同）

②（正頼）あてこそその御徳に、この人の、かの君の御妻にてあら

むことよ。ただ人のよきにはまさりなむかし。ゆめ気色見すな。あてこそその御正身と思ひなしてあれ。（藤原の君1・一六〇）

③（真菅）「そもそも、この御正身はいかにぞ。御使朝に賜ひつるは御まぼりものたてまだせむ」などいひて往ぬ。（藤原の君1・一九七）

④（女一の宮）「それは人のしたまふにもあらざる。対面したまはぬをこそ、誰も誰ものたまはすなれど、聞くやうありとて、正身こそ対面賜はさんめれ。」（国譲下3・二九六）

⑤朱雀院、今宵の尚侍の祿に、いかなることをせむ。いぬ宮に、いと上手に、（中略）（嵯峨院）「げに、いかがはあるべからむ。ここには、世を去りて久しくなりたり。大將を、人より越して、大臣になして、ここにて大饗させたらむ、むかしの霊も、少しうれしと見るべきを。かの正身には、正二位の加階をものして、めづらかなることをとどめ置かむなむ、かの身に榮えあるべき。ここに聞こえむ。」（樓の上下3・六一〇）

五例とも会話文に用いられている。①は老親王上野宮が左大將の九番目の娘あて宮の婿を望んで外れ、父大將にもあて宮本人にも希望の手紙を出したが、返事もくれないので陰陽師らを呼んで相談するところである。これまでは「あて宮」、「九」と呼ばれていたが、文中父大將にだけではなくあて宮にも手紙を出したことを明確に書いているので、あて宮本人の気持ちも確認できた上野宮の発言であ

ろう。この「正身」は裳着したばかりのあて宮が既に示している理想性と神聖性、自立性を語る語である。②は父正頼の会話文で、上野宮があて宮を略奪しようとする謀計を知り、相手の計略の裏をかき、偽のあて宮を用意し、替え玉に言い付けるところである。本物と替え玉の筋が語られるくだりに「正身」の語が用いられるところ『通典』と通底する。③はもう一人の求婚者六十歳ばかりの滋野真菅が仲媒の殿守に頼むところである。「そもそも」、「いかに」、「御使」などの語は「御正身」とともに話者の願望の程度を深めるための言い回しである。その裏に男女の意志交換の難しさも了解できる。④の主体は六の君である。他人と本人とを対比することによって、地位が揺るがされようとする六の君に対する敬意、北の方という身分の強固さを話者が用いる「正身」の語から読み取れよう。⑤の主体は俊蔭の娘である。段の始めに「尚侍」で明示されているが、嵯峨院の話では「むかしの霊」を意識しながら、父親から奇瑞を招く琴の秘伝を受け継いだ俊蔭の生き写しでもある尚侍を「正身」と呼んだ。この「正身」は尚侍の超能力、神力を承認し、「尚侍」としてではなく、鎮魂すべき俊蔭の娘として働いた結果である。

前三例はあて宮の婿取りをめぐる物語の初期の「藤原の君」巻に集中して使用されているのが特徴である。以後あて宮の成長とともに、求婚話が後まで続いても再びあて宮に用いられることがなかった。それは十二歳ばかりのあて宮の抜群の才能と性質を裏付けるための言葉である。ある人物のある時期に集中する特徴がこれから考

察する多数例が出た『落窪物語』や『源氏物語』でも顕著である。

五 落窪物語の用例

①『この蔵人の少将の方なる小帯刀といふは、この月ごろあこぎに住む』と聞き、思ひつるは、はや正身に立ちかかりにけり。

(巻一・一〇〇 新編全集本 以下同)

②あこぎがもとに、少将の御文あり。「いかに。その部屋はあくや」と、いみじくなむ。なほ便宜あらば、告げられよ。さりぬべくは、必ず必ず、奉りたまひて、御返りあらば、慰むべき。いとあはれなることを思ふに」とあり。正身におろかならず、いみじきことを書きたまひて(巻一・一一三)

③あこぎも、つと添ひて、『御忌日なり。今宵過ぐして』と、正身ものたまひし、いみじく惑ひたまひしかば、やをらただ寄り臥しにき。(巻二・一四〇)

④「いかがのたまふと、正身に聞かせたてまつりたまへ」とのたまへば、「四の君わたりたまへ」と呼べば、おはしたり。(巻四・三〇八)

⑤殿聞きたまひて、「北の方だにさのたまはば、正身ものし」と思すとも、ただしてむ。いとよき人なり。この月、晦日に下るべし。『同じくはとく』とのたまひき。はや四の君、ここにわたしたまへ」と少将にのたまへば(巻四・三二〇)

⑥薛絵の御衣櫃一具に、片つ方には、かげ物一襲に、椅具しつ

つ、今片つ方には、正身の御装束三領、いろいろの織物の桂かさなりたり。(巻四・三三〇)

落窪物語には以上の六例あり、②の地の文以外は全部会話文である。前三例は落窪の姫君と少将道頼との交際が継母に発覚し、継母が夫中納言に姫君があこぎの夫帯刀と密通していることを偽って讒言するところから、落窪の君、道頼、あこぎ、帯刀の四人を巻き込む複雑な四角関係に引きずる不安定な時期に落窪の君一人に用いられている。道頼との安定した家庭生活に落ち着いた巻二の後半から物語の最後まで落窪の君にこの語が用いられることはなかった。高貴な身分でありながら、侍女あこぎと同列されてしまうような主従関係を混同させないために作者は「正身」の語で落窪の君の高貴さ、苦難後の幸運を暗示しているのではない。宇津保の②と同じく、人間関係が混同されやすい場面に当該語が用いられる可能性が高い。後三例は、忠頼と継母の間に生まれた四の君に用いられるもので、四の君の再婚をめぐる巻四に集中している。四の君本人と周囲の人々と区別して描かれる点は前三例と同じであり、詳しくは言及しない。

『落窪物語』の六例に対する分析によって、中心人物の存在が混同されやすい時、及び周囲の人間の態度と比較されたり、対立したりする時「正身」で示されることが多いのが分かる。同語はほかの呼称に比べて用例数が少なく、本人の身分や意思を表に出さなければならぬ時に用いられる語である。「正身」で呼ばれる姫君は独立

した一社会人とはされておらず、常に他者と比べられ、多数の他者に囲まれているものであり、その集団の意志がつまり姫君のそれであるというように認識されてきた慣習があるようである。

六 源氏物語の場合

源氏物語三十一例のうち地の文が二三例、会話文が四例、心中思惟が四例という分布である。『宇津保』、『落窪』の会話文に比べて地の文の数が主流になっているが、重点が話者の立場から作者もしくは語り手の立場へ変ろうと新しい傾向を示している。すべての用例の共通特徴を探るために、一覧表を作成した上、全例の原文を引用することにした。

正身の対象	用例数	巻 名 ・ 数 (表現)
指 喰 の 女	1	帚木 1 (会話)
末 摘 花	4	末摘花 4 (地の文)
明 石 君	4	明石 3 (地の文) 初音 1 (地の文)
玉 鬘	4	玉鬘 1 初音 1 蛭 1 真木柱 1 (すべて地の文)
雲 井 雁	1	蛭 1 (地の文)
鬘黒の北の方	3	真木柱 3 (会話・心話・地の文各 1 例)
女 三 宮	1	若菜上 1 (地の文)
落 葉 宮	3	夕霧 3 (会話・心話・地の文各 1 例)
弘徽殿女御と玉鬘の大君	1	竹河 1 (地の文)
中 君	4	総角 3 (地の文) 東屋 1 (心話)
匂 宮	1	総角 1 (地の文)
浮 舟	3	東屋 1 (地の文) 手習 2 (会話・地の文各 1 例)
女 二 宮 (薫の北の方)	1	浮舟 1 (会話)

表で示されたものの中で主要人物が多いが、藤壺や夕顔、葵上、六条御息所、紫上、宇治の大君などの主要人物には用いられていない。また、男性には勾宮の一例しかない。用例数の多い末摘花、明石君、玉鬘、鬚黒の北の方、落葉宮、宇治の中君及び浮舟など、作品の中で欠点が目立ったり、地方育ちだったり、多難に遭遇されたりする女性らに用いられる傾向がある。

1 (左馬頭の体験談) 大いなる籠にうちかけて、引きあぐべきものの帷子などうちあげて、今宵ばかりやと待ちけるさまなり。さればよと心おごりするに、正身はなし。さるべき女房どもばかりとまりて、『親の家にこの夜さりなん渡りぬる』と答へはべり。(帚木1・一五二)

指喰いの女の話である。「この人」、「この女」、「女」と呼称されてきたが、男が泊まりに行くと、女が家にいないと分かり、その場には「正身」と語られている。数人の女房だけが留守番をして、女は実家に帰った。女房どもの存在に対して女君本人がいないと話者の眼差しによる結果である。

2 命婦のかう言ふを、あるやうこそはと思ひてものしたまふ。乳母だつ老人などは、曹司に入り臥して、夕まどひしたるほどなり。若き人二三人あるは、世にめでられたまふ御ありさまを、ゆかしきものに思ひきこえて、心げさうしあへり。よろしき御衣奉りかへ、つくろひきこゆれば、正身は、何の心げさうもなくておはす。(末摘花1・三五五)

地の文である。末摘花が命婦、乳母、若き人二三人と対照的存在であるように描かれ、若き人の「心げさうしあへり」に対して、末摘花は「何の心げさうもなくしておはす」と語られ、前に呼ばれた「女君」のかわり「正身」で呼ばれるのは若き人たちの心境との対比を語り手が意識した結果であろう。

3 命婦、あなうたて、たゆめたまへる、といとほしければ、知らず顔にてわが方へ往にけり。この若人ども、はた世にたぐひなき御ありさまの音聞きに、罪ゆるしきこえて、おどろおどろしうも嘆かれず、ただ思ひもよらずにはかにて、さる御心もなきをぞ思ひける。正身は、ただ我にもあらず、恥づかしくつましきよりほかのことまたなければ、(末摘花1・三五七)

2の文に繋がる地の文である。ここも末摘花が若人たちと対置しており、高貴な身分のわりに世間知らずで、身分不相応な振る舞いであることを語っている。皮肉めいた意味合いが「正身」の語に込められている。

4 かしこには、待つほど過ぎて、命婦も、いといとほしき御さまかなと、心うく思ひけり。正身は、御心の中に恥づかしう思ひたまひて(末摘花1・三五九)

5 心にくくもてなしてやみなむと思へりしことを、くたいてける、心もなく、この人(命婦)の思ふらむをさへおぼす。正身のものは言はで思し埋もれたまふらむさま、思ひやりたまふもいとほしければ、(末摘花1・三六二)

4と5も地の文であり、やはり末摘花の様子について女房と比較される語り方である。末摘花に用いられている全部の四例が光源氏との逢瀬を語るあたりに集中している。それに対する考察だけでも分かるはずだが、姫君の結婚となると、周囲の女房たちの見方が姫君の気持を先行して語られるのが普通のものである。男女が会う前に女房という仲介役が重要な役目を担当しているので、仲介者の判断が姫自身より軽くはないと言っても過言ではない。また、通い婚は室内（姫君）と室外（懸想人）の交流から始まっているものであるため、正身の語を用いる場面では姫君が女房などを見分けがつきにくい状況に置かれていることもありうるのである。それと逆に、垣間見の場合は姫君の姿を把握できるためか「正身」を使っていない。従って紫上には用例がないのも分かる。二条院に引き取られてから光源氏との間で安定した関係を保った時期は勿論、光源氏が女三宮を迎えることで紫上は落窪物語や宇津保物語の登場人物たちと同じように悩む状況に置かれても「正身」と呼ばれたことがない。

6心もとなう口惜しと、母君と言ひあはせて嘆く。正身は、おしなべての人だにめやすきは見えぬ世界に、世にはかかる人もおはしけりと見たてまつりしにつけて、身のほど知られて、いとほるかにぞ思ひきこえける。（明石2・二二八）

7（源氏）「とかく紛らはして、こち参らせよ」とのたまひて、渡りたまはむことをばあるまじう思したるを、正身はたさらに思ひ立つべくもあらず。（明石2・二四二）

8（入道）いとおものおぼえず、しほたれまさる。起居もあまましうよろぼふ。正身の心地たとふべき方なくて、かうしも人に見えじと思ひしづむれど、身のうきをもとにて、わりなきことなれど（明石2・二五九）

9暮れ方になるほどに、明石の御方に渡りたまふ。近き渡殿の戸押し開くるより、御簾の内の追風なまめかしく吹き匂はして、物よりことに気高く思さる。正身は見えず。いづら、と見まはしたまふに、硯のあたりにぎははしく、草子どもとり散らしけるを取りつつ見たまふ。（初音3・一四三）

明石君を中心とする四例はともに地の文であり、個人別で数えれば全ての作品の中で用例数が最も多い人物の一人であることから、特性があるはずの女性として考えるべきである。源氏物語において、京の上流社会に交じってしかるべき地位を確保できた田舎育ちの女性には明石君と玉鬘の二人だけで、後者は後に述べるが、二者とも同語の用例が多い。明石君については田舎生まれのわりに、身分の分別、親と自分の状況に対する思慮を所有していることを際立たせるために「正身」の語を当て嵌めただろう。前三例は明石君と光源氏の結婚、及び帝の召還による別れを描く時期に集中している。その間に「むすめ」、「女」などでしばしば呼ばれたこともあるが、明石君本人の考えと、親、特に明石入道の考えとが比較される描写では「正身」という言葉を用いることによって、本人の考え方を主張する語り方が特に顕著である。田舎育ちの明石君を意図的に造型した

いという意欲が作者にはあつただろう。9は前三例の思惟的判断によるものの使い方とは違い、知覚的判断によるもので、六条院で安定した生活を得られてから9の場面にだけ「正身」と呼ばれた。動詞は「あり」ではなく、「見え」となっているので、物を隔てて女房だけが確認され、本人はその場に居ないと理解されよう。「暮れ方」だし、物越しでもあり、本人がいるかどうか分かりづらい状況であることは間違いない。前三例の延長線上にあるものと考えられ、明石君という女性について「正身」として相応しい人物だという作者の価値判断が働いた結果であろう。

10 田舎びたる目どもには、ましてめづらしきまでなむ思ひける。

正身は、「ただかごとばかりにても、実の親の御けはひならばこそうれしからめ、いかでか知らぬ人の御あたりにはまじらむ」とおもむけて、苦しげに思したれど、(玉鬘3・一一八)

11 をかしげなる童べの姿なまめかく、人影あまたして、御しつらひあるべきかぎりなれども、こまやかなる御調度は、いとしもとのへたまはぬを、さる方にもきよげに住みなしたまへり。正身も、あなをかしげ、とふと見えて、山吹にもてはやしたまへる御容貌など、(初音3・一四二)

12 宰相の君とて、手などもよろしく書き、おほかたも大人びたる人なれば、(中略)正身は、かくうたであるもの嘆かしさの後、この宮などはあはれげに聞こえたまふ時は、すこし見入れたまふ時もありけり。(螢3・一八九)

13 童なる八郎君はむかひ腹にて、いみじうかしづきたまふが、いとうつくしうて、大將殿の太郎君と立ち並みたるを、尚侍の君も他人と見たまはねば、御目とまりけり。(中略)正身も女房たちも、かやうに御心やりてしばしは過ぐいたまはましと思ひあへり。(真木柱3・三七四)

玉鬘の四例とも地の文である。10は「田舎びたる目ども」なる女房らの喜ぶ反応と相反する玉鬘の源氏観を説く文である。11は語り手の視線からとも光源氏のそれからとも考えられるが、六条院の西の対に住む玉鬘の情景である。童べの姿、人影が多く見られる中、玉鬘の姿も光源氏に物越しに見られている。「正身」の語は女の美貌を賛嘆すると同時に、地方育ちの玉鬘が京の女性と質の異なることも忘れてはいけない注意記号であろう。12については、螢宮の懸想文の返事は本人ではなく、女房の宰相の君に光源氏が書かせたのである。本巻の冒頭には「対の姫君」と呼ばれているが、他人に代筆され、光源氏に操られる玉鬘を描くところに「正身」と呼ばれている。この例の代替者のモチーフは『宇津保物語』の②の状況に似ている。ここの「正身」は視覚的判断と心理的判断の両方が働いた使い方である。13では尚侍の君と呼ばれていたが、女房と同格に並べられているのは、玉鬘の性格の側面、地方育ちの彼女の軽薄さを語り手が語りたかったのであろう。

14 正身ばかりには、おろかならぬあはれを尽くし見せて、おほかたには焦られ思へらず。せうとの君たちなども、なまねたしな

どのみ思ふこと多かり。(蜩3・二〇九)

夕霧と結婚する前の雲井雁に一例ある。ここの地の文では「姫君」の代替語として「正身」と呼称し、雲井雁の周囲の人々と女本人に対する、夕霧の正反対の態度を示すところである。雲井雁との交際が相手の家族に反対されるものの、女の気持だけを大切にする夕霧の決意である。その根底にある姫君の婚姻が主に親・兄弟らによって決められた時代の文化の一斑が知られる。

15 中将、木工など、「あはれの世や」などうち嘆きつつ、語らひて臥したるに、正身はいみじう思ひしづめて、らうたげに寄り臥したまへり、と見るほどに、にはかに起き上りて、大きな籠の下なりつる火取りを取り寄せて、(真木柱3・三五六)

16 大将の君、かく渡りたまひにけるを聞きて、「いとあやしう、若々しき仲らひのやうに、ふすべ顔にてもしたまひけるかな。正身は、しか引ききりに際々しき心もなきものを、宮のかく軽々しうおはする」と思ひて、(真木柱3・三六八)

17 (鬚黒)「よし、かの正身は、とてもかくても、いたづら人と見えたまへば、同じことなり。幼き人々も、いかやうにもてなしたまはむとすらむ」と、うち嘆きつつ、(真木柱3・三六九)

15、16、17では鬚黒の北の方が「正身」の語をもつて語られている。15は地の文で、「北の方」の替りに「正身」と呼ばれ、召人の中将や木工の態度と比べられるところである。16の鬚黒の心中思惟、引き続き17の鬚黒の会話文に二回用いられ、「幼き人々」を心

配する使用者側の心情がここの「正身」の意味を解説する焦点となる。「正身」の主体が異常な状況に臨んでいるだけではなく、使う人即ち心中思惟の主体或いは話者の困難な状況も反映している。

18 いはけたる遊び戯れに心入れたる童べのありさまなど、院はいと目につかず見たまふ事どもあれど、ひとつさまに世の中を思しのためはぬ御本性なれば、かかる方をもまかせて、さこそはあらまほしからめ、と御覧じゆるしつつ、いましめとのへさせたまはず。正身の御ありさまばかりをば、いとよく教へきこえたまふにすこしもてつけたまへり。(若菜上4・一二六)

女三宮をさす地の文である。すぐ前は姫宮と呼ばれていたが、数知らぬ大勢の女房や童たちに混じつて童遊びをする女三宮に「正身」の語を用いるのは、宮の高貴な身分を喚起しなければならない事情を語っている。高貴な身分に不相応な日常に光源氏が気づいたからである。「童べのありさま」と比較され、女の身分にあるべき行動と実際のそれとのギャップが体现されており、女三宮に負的存在を意味する「正身」が用いられている。

19 かしこには(御息所)、(中略)もて離れて、あさましう心もくだけで、よろしかりつる御心地、またいという悩みたまふ。なかなか正身の御心の中は、このふしをことにうしとも思し驚くべき事しなければ(夕霧4・四二〇)

20 正身は強う思し離るとも、かの一夜ばかりの御恨み文(御息所の)をとらへどころにかこちて、えしもすすぎはてたまはじ、

と頼もしかりけり。(夕霧4・四三三)

21 (夕霧) 「故御息所は、いと心強うあるまじきさまに言ひ放ちたまうしかど、(中略)さまざまに、いかに人あつかひはべらむかし。さしもあるまじきをも、あやしう人こそもの言ひさがなきものにあれ」と、うち笑ひつつ、「かの正身なむ、なほ世に経じと深う思ひたちて、尼になりなむと思ひむすばほれたまふめれば、何かは。(後略)」(夕霧4・四五四)

落葉宮に関する三例は夕霧の妻になるまでの交渉段階に集中している。19は地の文である。しかし、同巻の少し前のところに御息所と落葉宮の二人の心情を語るとき、「苦しき御心地にも、名のめならずかしこまりかしづききこえたまふ。(中略)宮も、もののみ悲しうとり集め思さるれば、」(夕霧4・四〇九)とあるように「宮」であつた。母親も娘も同じ悲しい気持であり、つまり類似関係の場合には「正身」の語を使わない。19の場合、御息所の嘆きと対照的に描かれる落葉宮のことを強調するために「正身」が用いられている。20は落葉宮に関する夕霧の心中思惟で、母の御息所と本人の見方の対比関係において同語が使われた。21は夕霧の会話文であり、落葉宮本人の意志と人々の考え方と比較される描き方である。

22 正身の御心どもは、ことに軽々しく背きたまふにはあらねど、さぶらふ人々の中にくせぐせしき事も出で来などしつつ、かの中将の君の、さいへど人の兄にてのたまひしことかなひて、(竹河5・九四)

玉鬘の娘大君を御息所、冷泉院の弘徽殿女御を女御方と呼んでいたが、ここでは本人同士と女房らとの対比態度を示すために複数の人を正身と呼んだ、ほかにない例である。

23 遥かなる御道中を、急ぎおはしましたりけるも、うれしきわざなるぞ、かつはあやしき。正身は、我にもあらぬさまにてつくろはれたてまつりたまふままに、濃き御衣の袖のいといたく濡るれば、さかし人もうち泣きたまひつつ、(総角5・二六一)

24 御文のあるを、さればよ、と胸つぶれておはするに、(中略)正身もいささかうちなびきて、思ひ知りたまふことあるべし。

(総角5・二六九)

25 (大君が) 思ひ乱れたまふに、心地も違ひて、いと悩ましくおぼえたまふ。正身は、たまさかに対面したまふ時、限りなく深きことを頼め契りたまへれば、さりともこよなうは思し変らじと、(中略) 心の中に思ひ慰めたまふ方あり。(総角5・二八九)

26 乳母、車請ひて、常陸殿へ去ぬ。北の方にかうかうと言へば、胸つぶれ騒ぎて、(浮舟の母) 「人もけしからぬさまに言ひ思ふらむ。正身もいかが思すべき。かかる筋のものの憎みは、あて人もなきものなり」と、(東屋6・六八)

宇治の中君にも四例の高い使用がなされている。26の心中思惟のほか全部地の文である。23では新婚の中君のために勾宮を迎える大君の嬉しさと対照的に中君は悲嘆に明け暮れている。薫の手引きによる突然の逢瀬と大君によって結婚させられた中君自体の文句はほ

とど語られず、23の場面では中君は泣くことに終始し、24では句宮の情に感銘することがすべてであり、当事者と言っても、すべてが姉に任せる身分である。このくだりでは大君が姫宮と称されているのに対して、中君はたまに「この君」と呼ばれるだけである。事件の当事者でありながら自己主張を述べられない環境において、「正身」で言い出す文は語り手が姫君の立場になって代言する語り方と考えられる。25では宇治へ紅葉狩をした句宮が山荘に行かずに帰ってしまい、大君の煩いがつる一方、冷静にこのことを理解する本人の中君の心中を述べるところであり、周囲の人々の思惑に対して、自己の信念を持っている中君に対して作者は「正身」をもつて語る。26は浮舟の母が浮舟が句宮に見られたことを知ったくだりである。この「正身」の例は中君と句宮の両説があるが、後文の「憎み」は中君のやきもちと解釈したほうが文章が通じやすく、全集本の説が妥当だと思い、中君のほうを取った。「人も」（周りの人）のこの事件を見る反応に対して中君がどう考えているかと、浮舟の母の思いが語られている。四例とも婿取りという重要な時期、或いは手に入れた幸せが異母妹の出現によって潰されそうな危機的状況に遭遇した中君に用いられている。いずれも中君と、姉の大君や女房たちとの対比関係の中で用いられている。

27 正身の御ありさまはそれと見わかねども、紅葉を葺きたる舟の飾の錦と見ゆるに、声々吹き出づる物の音ども、風につきておどろおどろしきまでおぼゆ。（総角5・二八三）

本論が調査対象となる物語作品で男性に使用されるただの一例であり、それは句宮に関する地の文である。山荘にいる若き人々が舟の中にいる大衆から数回しか会ったことがない句宮の姿を見分けるのは不可能である。若き人々の視覚による結果である。男性に用いられることは源氏物語だけではなく、『通典』や『令義解』の前例がある。

28（浮舟の母）やむごとなき御仲らひは、正身こそ何ごともおいらかに思さめ、よからぬ仲となりぬるあたりは、わづらはしき事もありぬべし。（浮舟6・一六〇）

薫の正妻女二宮をさす会話文の一例である。「正身」と「あたり」とを対比関係に仮想した描き方である。

29 ただ、この御方のことを思ふゆゑにぞ、おのれも人々しくならまほしくおぼえける。まして、正身をなほなほしくやつして見むことは、いみじくあたらしう思ひなりぬ。（東屋6・五二）

30 憑きたる人ものはかなきけにや、はかばかしうも言はず。正身の心地はさはやかに、いささかもおぼえて見まほしたれば（手習6・二八三）

31（小宰相の君）「かの僧都の山より出でし日なむ、尼になしつる。いみじうわづらひしほどにも、見る人惜しみてせさせざりしを、正身の本意深きよしを言ひてなりぬる、とこそはべるなりしか」と言ふ。（手習6・三五三）

浮舟にも三例用いられている。29、30は地の文で、31は会話文

である。29の「正身」の語は今まで隠されてきた浮舟にまつわる、八の宮の高貴な血筋を思い出させる。30は浮舟の体に憑いた憑坐が僧都の法力によって退散され、自分自身を取り戻した浮舟本人を物の怪に対して「正身」と呼んだ。31は小宰相の君が薫に浮舟の出家について報告するところである。そばの人たち（見る人）と浮舟自身の態度が対照的に描かれている。これまで二人の男に求愛され、母や身边の者たちによって物事を運ばれたことに対して、浮舟が初めて自分の意志を示しており、それが最後のヒロインを浮き彫りにする作者の意図であろう。

源氏物語には用例数も該当者も最も多く、「正身」の語意を解説するのにはそれに対する考察が一番有効ではないだろうか。会話文にしろ、地の文にしろ、或いは心中思惟にしろ、「正身」の語を必要とするある環境は共通している。それは語り手もしくは話者（心話者を含む）の眼差しから中心人物（多くの場合女性）の存在乃至身分或いは特徴、意見などを強調しようとする場合である。表によっても、当該語が年齢・性別・階級を問わずあらゆる人間に適用する言葉であることが理解される。匂宮の一例以外に全部姫君に対する語り手の眼差しか、懸想人の立場で用いられている。しかも、ある男性に垣間見されたことがあり、或いは安定した男女交際の姫君にはその男性の立場からは用いられていない。また、各例に対する分析によって、小山清文氏が述べたように「正身」で示される人物が不安定な状況に置かれた場合、当該語が用いられる現象が顕著であるが、

1の指喰の女、9の明石君、27の匂宮などの用例にはそういう「不安定」を看取できないため、「不安定な状況」は「正身」を使う根本的な原因ではないことも理解される。「正身」の語は縁談や人生の節目における女性の悩みを表す言葉というよりも、一人の人間としての女性の考え方や性質を表現する言葉なのではないか。したがって、「正身」の着力点は「本人」ではなく、「どんな」本人なのか物語作者の気になるところであろう。また、『宇津保』、『落窪』等と違って、源氏物語には地の文の用例が際立って多く、語り手である作者が作中人物の口を借りて生の感情を表す態度から、その眼差しが「正身」である人物に注目する創作態度に変った現象も示されている。

前文でも触れたが、藤壺、葵上、紫上、宇治の大君、六条御息所、夕顔たちには用例がない。前にも述べたが、紫上は最初から安定した環境を獲得しているため、用例がなかった。光源氏の立場から見た藤壺は、幼少の時から桐壺帝の光源氏に対する無防備の愛情があったために、容貌・特徴等の情報を認知した場合「正身」を確認する必要がおのずとなく、同語は相応しくない。葵上は光源氏の正妻であり、結婚時点から光源氏にとっては明確な存在であるから「正身」を使う必要がない。夕顔との恋は瞬く間に起り、そして終わったもので論外とする。六条御息所は光源氏との交際を物語で語り始める時すでに落ち着いた関係になっているので、同語は当たらない。

「正身」の言葉を分析の対象とする場合、当該描写において人物の相対的位置、身分差、年齢、出自、周囲の眼差しなどの条件を総

合して考えるべきである。例えば、宇治姉妹を垣間見たことのあ
る薫の眼差しからは大君にも中君にも「正身」の語を用いられない。
宇治姉妹を垣間見る経験のなかった勾宮の眼差しからは姉か妹か
は不明で「正身」の語を使う必要があった。だから薫以外の男性と
交渉がなかった大君には用例が与えられていない。空蟬の場合、手
引きしたのが女房ではなく弟の小君であり、本人の考えと周囲の者
と対比関係になる状況はなかったためか、軒端萩と人違いが気づか
れた時さえ「正身」ではなく「本意の人を尋ね寄らむも」（空蟬1・
一九九）とあるように「本意の人」と呼ばれている。

源氏物語の「正身」と呼ぶすべての場面を解釈できる共通性は語
り手或いは作中人物が「正身」で示す人物の存在、あり方を眼差
しをもって確認するところである。その根拠は『通典』の「正確な
身柄」にあると考えられる。これが当該語が用いられる基本であり、
これを基にして該当人物の考え方、身分、個性などを確かめ、さら
に強調する機能まで発達したと考えられる。言い換えれば、「正身」
という言葉に対する認識は視覚的判断から心理的判断に至ったよう
である。この観点は用例数の少ないほかの物語にも適用される。

七 ほかの物語の用例

大系本『狭衣物語』と『夜の寝覚』と平安末期から鎌倉初期にか
けての『在明の別』にも一例ずつあるが、当該語が用いられる環境
が以前の物語用例に似ているので引用しないことにした。特質のあ

る『浜松中納言物語』の一例だけを取り上げてみる。

御答へを、よろしう聞こえつべき人もなし。わりなうつつまし
うおぼしわづらひて、（中略）正身の声聞かせむもうたてあり、
など思ひわづらひ、琴にて答へ給ふ思ひやりは、山がつめかず、
心まさりしてをかしければ、（全集本巻三・二八三）

地の文である。中納言が唐后の異母妹である吉野の姫君と初めて
和歌を贈答する場面の描写である。通常なら女房を介して贈答を交
わすが、しっかりした女房がいなかったため姫君が直接返歌をしなけ
ばならない。しかし、初めて男性と歌を交わす場合生声で返事はせ
ず、女房を介して返歌するのが教養深い女性のあるべき振る舞いと
されていた。よって姫君は琴の音にのせて返歌をしたわけである。
それでも伴奏がない生声よりは丁寧だと語られている。ここについ
て大系本は「本人のこと。「正身の声」は歌う声でない本人の地声の
意であろう」と解釈している。「歌う声」か「本人の地声」かについ
てはここでは論じる余地がないが、どちらにしても姫君の生声を男
に聞かせるのが「わづらうほどのことであろう。「正身」の語は「御
答へを、よろしう聞こえつべき人もなし」の事情を意識した上で用
いられたのである。以後中納言が吉野姫君のところに世話役の女房
たちを遣わしてから姫君の生声の応答がいらなくなるにつれ、「正
身」の語も同物語では跡を絶った。ここの語り方が源氏物語蜻蛉巻
に薫が宮の君を問う場面と共通する点がある。「人づてともなく言ひ
なしたまへる声、（中略）ただ今は、いかで、かばかりも、人に声

聞かすべきものとならひたまひけん、となまうしろめたし。」(蜻蛉6・二六三)と語っているように、姫君が人に生声を聞かせるのも下品で非常識な振る舞いだとされている。後述するが、このような社会通念が「正身」を物語用語化した要因だろうと見られる。

八 結 び

万葉集から、中古、中世にかけて、「正身」の語意の変遷を見てきた。物語用例の意味が、万葉集とは明らかに変化を遂げている。使用回数は源氏物語でピークを迎え、以降減少した現象も示されている。宇津保物語あたりから上流社会の女性を語る作品が生まれ、その必要に応じて万葉集の意味と違ったそれが使い始められ、中世以後女性のあり方が平安時代とは相違してきたために物語作品で定着した同語の意味が消えてしまったと考えられる。

以上見てきた如く、和漢の「正身」の語意はそれぞれ単一ではなく、多くの意味を所有するようになった。中国の文学で言う「正身」は単なる本人ではなく、非替え玉である状況を表すニュアンスがあり、通常では替え玉を使う作品に用いられる言葉である。一方、平安時代の物語には使用率が最も高く、基本的には物語の「正身」の用いられる場面は男女交際という枠を超えてはいないが、例えば『宇津保』『源氏』においても、諸例は同義性を持たない。時には勾宮の場合のごとく単なる本人の意味だったり、時には女性本人の意志を示す語だったり、時には女性本人の身分を思い出させたり、時に

はあて宮の場合のように替え玉の対語だったり、中国文学と日本の他の時代の文学の用例にない独自性を知ることができた。替え玉・代理者ではなく、本人の意志、主張を強め、女性に多く用いられた、主体が他人と対置関係にある場合によく用いられるなど、同語の輪郭が明確になってきた。殊更、物語では主に周囲と対比される主体人物の一性質を主張するために用いられる傾向がある。「正身」は男性にも使われるけれども、王朝上流貴族の生活実態を描く作品の要請で徐々に女性の特徴を述べる言葉に変化したようである。

ところが、その現象に対して、漢籍では主に男性に、唐までは女性を対象とする用例は見つからない。何故このような現象が起り、「正身」の意味合いが複雑化され、中国語の意味と変ってきたのだろうか。考えられる原因の一つは文化の差異によるだろう。物語作品の姫君が他人、主に女房を介して男との交渉を与えられるのが常套であった。それに対して唐伝奇小説の場合、描かれる主人公らの交友―男女の交際を含めて―は自由奔放的なもので、他人の不関与が通常である。伝奇小説の主人公は妓女にしても良女にしても自己表現、行動範囲は男と同様に描かれている。保護者や女房の関与はそれほど強くない。男を救ったり、陥れたり、俠義を振舞ったりする女性が頗る好まれ、伝奇の共通の特徴とも言える。したがって、伝奇には第一、第二人称が多く用いられている。しかし、物語の女性性は伝奇の女性とは両極端の位置にあり、ほとんどが深窓裏の姫君をめぐるものとなっている。実際「正身」の姫君に対して周りの女

房や乳母が「替身」役を勤めている。よって、物語作品には中国作品で対語として出てくる「正身」の反対語「替身」の言葉が見つからないけれども、「替身」が働いている状況があることを否定できない。それが冒頭で言及した白石佳和氏の「親や女房という周囲の人々の存在を注目させる言葉」として用いられた要因であろう。

総括して、「正身」という言葉は源氏物語では中国文学の影響を受けた万葉集や先行物語を享受しながら地の文でも使われるようになり、さらに源氏物語の頻用によって物語用語に定着させたといえる。登場人物の人間関係が極めて複雑な場面を象徴する言葉であることはすべての用例の共通するところである。同語は万葉集以降日本宮廷生活文化、姫君のありかたに合わせて古来の意味の上に異義を充填された言葉となっている。それは中国と日本の文化の違いを語る言葉の一つにすぎない。特に女性のあり方の違いを比較する時、重みのある言葉である。本論では言葉の比較の一実験として「正身」の語だけを取り上げてみた。成立して以来各時代の人々に研究され、文字の斟酌がされ続けてきた源氏物語にはまだ解釈しきれない箇所がたくさんあり、試行錯誤もあるだろうが、比較の方法を用いて語源を探ることによって原文をより分かりやすく理解できればと思い、今後はほかの語彙の課題をも視野に入れたと考えてみる。

注

(1) 中田武司「源氏物語「さうじみ」攷」 日本文学論究 一九八〇

年一二月 四〇巻

(2) 伊能健司「源氏物語の用語「正身」について」 中古文学論攷 一九八一年一二月

(3) 小山清文「源氏物語に於ける「さうじみ」試論」 教育国語国文学 一九八二年一二月 一〇巻

(4) 白石佳和「語りの方法としての「正身」」 国語と国文学 二〇〇二年三月 七九・三巻

(5) 『荀子』新釈漢文大系 明治書院 一九六六年一〇月

(6) 『通典』(唐)杜佑撰 王文錦整理の『伝世蔵書』「史庫通典」に収録される。海南国際新聞出版中心

(7) (清)吳璿編『飛龍全伝』 北京知識出版社 一九九七年

(8) 本論で言及した伝奇小説の内容については新釈漢文大系『唐代伝奇』が参考されたい。明治書院 一九七一年九月

(9) 故実叢書編集部編・近藤芳樹著『標注令義解校本』による。明治図書出版 一九九三年六月

補注

『源氏物語』の引用は、「日本古典文学全集」(小学館 昭和五十一年)により、巻名・冊数・頁数も掲げた。